

“田老万里の長城”を見学する。これは津波災害から町を守るための総延長2,433m、高さ10mに及ぶ防浪堤で、二階建ての家よりもまだ高いというしろものである。これでチリ地震津波の被害を防ぐことができたという。

このように学生時代最後の巡検はたくさんの思い出を残して無事に終了し、いつまでも心に残るであろう実り多いものとなったのであった。

(7月11日～14日 三上教官指導)

筑波巡検

高橋昌子

一般にはガマと山麓の研究学園都市で知られる筑波山であるが、地質的には古生層にハンレイ岩を捕獲岩とした花崗岩が貫入し、さらに侵食によって山頂にハンレイ岩が表出する格好となった珍しいタイプの山である。よって私達も出発前からその山容をこの目で確かめようという意欲に燃えていた。

当日10時に筑波駅前からバスに乗車。アカマツ林にはさまれたカーブの多い道を登り、標高240m地点へ行く。山麓より山腹の方が温暖なので集落が発達した好例である。早速露頭の観察を行なった。ペディメントをなす岩石の小さなものの風化土壌である。ボロボロと乾燥した感じで、火山灰層のベッタリした感じとは異っている。花崗岩の大石も各所にみられるが、これは基盤ではなく上から落下したものである。頂上から転がってきたハンレイ岩らしい小石もみられた。

少し下って、標高130m付近のみかんの木を見た後は、神社そばから山頂行きのケーブルに乗った。到着後、2つある山頂のうち低い方の男体山頂へ、次いで標高876mの女体山頂へ登る。地中

でできた節理が地表に出て風化作用を受け、そのすき間が広げられたという白っぽくなったハンレイ岩。その下には一面のブナ林が見られる。マツやスギなどの針葉樹林はむしろ下方の北斜面に分布するという。

徒歩で下山したが、その小道のあちこちでハンレイ岩の大石が様々な形態で私達を待ち受けていた。例えば、10m以上の高さを持つ「北斗石」、船が2隻並んだ形の「出船入船石」、2つの大石の上に今にも落ちそうな格好で大石が乗っている「弁慶七戻」など、石の一つ一つに名称が付けられている。

急に眺望が開け、つつじが丘に出た。親子のガマ像の下で再度露頭観察。今度は榛名山あたりから降ってきた鹿沼土と呼ばれる火山灰土の地層であった。花崗岩質の基盤で、水はけのよいこの付近は筑波山唯一の草原地帯である。

こうして、浅海先生指導のもと、期待していた以上の収穫を得て、私達は筑波山を後にした。

(7月13日 浅海教官指導)

仙台巡検

堤佳代

まだ残暑厳しい9月6日、初めての宿泊巡検に私達はそれぞれの胸に様々な思いを秘めながら、仙台駅へ集合した。

空はよく晴れていて、「杜の都」仙台は私達を快く迎えてくれているようだった。

井内先生指導のもとになる今回の巡検は、“広